

俗解てんてんてん初學子

林麿臣著

815.7

H372

此、取丸、良、著者

国立国会  
26. 9. 10  
図書館

# 俗解てよをを初學

明治二十五年七月  
片權魚詩の著者生字を初學

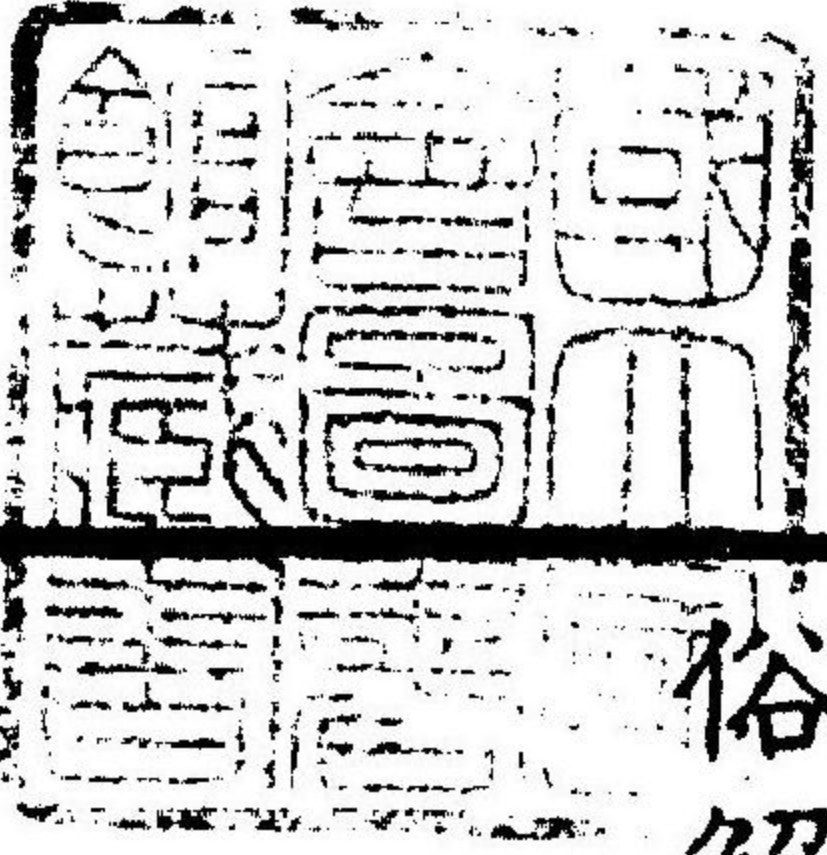
俗解てよをを初學下の巻

## 目次

- 第六章 てよをを「外」の結尾の解説ならびよ類別
- 第七章 てよをを「外結尾」の起結照應格の解説ならびよ類別
- 第八章 てよをを「外結尾」の譯解ならびよ「起結照應格」の活語表圖

○俗解てよをを初學下目次

245092



俗解てよをを初學下の巻

林 甕 臣 著

第六章

てよをを外の結尾の解説  
ならびに類別

てよをを外の結尾と名詞と動詞との語尾を  
もてたゞちよ各種起端靈辭に應トてその句尾  
をむまぶものをいふ。大別して名詞結動詞結の  
二綱とす。

名詞結とを事物の形體の上をさしてよびなを  
うごきはたらぬ名詞もて句尾をむまぶもの

をいふ。

たとへむ時<sup>レ</sup>志らぬ山を<sup>レ</sup>富士の嶺<sup>レ</sup>初霜の<sup>レ</sup>おき  
まどを<sup>レ</sup>せる白菊の花<sup>レ</sup>春霞を<sup>レ</sup>てるや何所<sup>レ</sup>など  
やうの富士の嶺白菊の花何所<sup>レ</sup>の類<sup>レ</sup>のごとし。  
〔動詞結〕と事物の所作形容の上、をさしてよび  
なまうごきはたらく〔動詞〕もて句尾をむまぶも  
のをいふ。

たとへむ鷲のなくなる聲を<sup>レ</sup>朝なくきく<sup>レ</sup>月夜  
よむおぬ人またる<sup>レ</sup>立田川よぞ幣を<sup>レ</sup>たむくる<sup>レ</sup>  
などやうのきく<sup>レ</sup>またる<sup>レ</sup>たむくる<sup>レ</sup>の類<sup>レ</sup>のごと

し。

### 第七章

てよをを<sup>レ</sup>外結尾の起結照應格  
の解説ならびに類別

〔動詞結〕は尾を三様と轉ぶるものと二様と轉ぶ  
るものとの二種あり。をなをち三様と轉ぶるもの  
を〔動質三轉各應格〕といひ二様と轉ぶるもの  
を〔動質二轉各應格〕といふ。また〔名詞結〕を尾を轉  
ぶるおとなし。おれを〔名質不轉通應格〕といふ。

〔動質三轉各應格〕とをむむの<sup>レ</sup>あそ<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>こと<sup>レ</sup>の各起  
端よあひ應<sup>レ</sup>てその句の語尾を〔所作動詞〕  
物ヲ所作



おれなり。生く盡く際く過ぐ和ぐ朽つ取づ懼  
延ぶ媚ぶ辞ぶ報ぶ強ぶ生ぶ荒ぶ咄ぶ嘆ぶ浴  
む疎む試む老ゆ報ゆ下る懲る免るトイフコ  
ト格ナリ。

さて起くをおくおくるおくれと三轉しもて  
おくををも起よもの起よも應トてそが結  
となりおくるをぞや起よもの起よも應と  
てそが結となりおくれをこそ起よ應じてそ  
が結となるあり。

たとへむ今朝をはやくおくる隣の人の今朝  
はやくおくる隣の人の今朝はやく起くる今

朝ぞはやくおくる今朝こそはやくおくれ  
とやうよ句首よ應じ句尾を三様よ轉じて  
むまぶがごこし。

自餘落つ戀ふ恨む悔ゆ舊るの五種もまたそ  
れよあひ準じおつおつるおつれまふまふる  
まふれうらむうらむるうらむれくゆくゆる  
くゆれふるふるふるれこやうよおのく三  
轉しもて各起端よあひ應じてそが結となる  
まとまべて上よおなじ。

下二段活なるを

ぎなをち得受く瘦を捨つ兼ね換ふ譽む超切  
 枯る植の十種おれなり。（コシラズアト）  
 さて得をうるうれと三轉しもてうをむ  
 起よもの起よも應じてその結となりうる  
 をぞや起よもの起よも應じてその結とな  
 りうれをこそ起よ應じてその結となるあり。  
 たとへむおれを幸をうる隣の人  
 の幸をうるおれぞおよなき幸をうるおれ  
 こそ幸をうれとやうよ句首よ應じ句尾を  
 三様よ轉じてむをぶおごとし。

自餘受く瘦を捨つ兼ね換ふ譽む超切枯る植  
 の九種もまたそれよあひ準じうくうくる  
 うくれやまやまるやまれまつまつるまつれ  
 かぬかぬるかぬれかふかふるかふれほむほ  
 むるほむれおゆるおゆるおゆるかるかるか  
 るれうるうるうるうれとやうよおのく三轉  
 しもて各起端よあひ應じてその結となるお  
 とまべて上よおなじ。

か行變格なるを

ぎなをち來の一種おれなり。（コノ格ノコトバ  
 來ノホカニナシ）

○俗解てよをを初學下

○五

さて「來」を「くくる」くれと三轉し「もて」を「も  
起」よ「も」の「が」起「よ」も應じて「そ」が「結」となり「くる  
を」ぞ「や」起「よ」も「の」が「起」よも應じて「そ」が「結」とな  
り「くれ」を「こそ」起「よ」應じて「そ」が「結」となるあり。  
たとへむ「都人」を「月見」よく「都人」の「月見」よく  
「都人」の「今宵」月見よく「都人」を「月見」よ「く  
る」都人こそ「月見」よ「くれ」とやうよ句首よ  
應じ句尾を三様よ轉じてむ「まぶ」がごとし。

「き行變格」なるを

「まな」を「ち」爲「の」一種「ま」れなり。  
（大座をトイフコト  
ハモコノ格ナリ。）

さて「爲」を「ま」る「ま」れと三轉し「もて」を「む」も  
起「よ」も「の」が「起」よも應じて「そ」が「結」となり「ま  
を」ぞ「や」起「よ」も「の」が「起」よも應じて「そ」が「結」とな  
り「ま」れ「を」こそ「起」よ應じて「そ」が「結」となるあり。  
たとへむ「今宵」を「月見」を「ま」る「人」の「今宵」月見を  
「ま」る「人」の「今宵」月見を「ま」る「今宵」ぞ「人」みな「月見  
を」ま「る」今宵こそ「月見」を「ま」れとやうよ句首  
よ應じ句尾を三様よ轉じてむ「まぶ」がごと  
し。

「な行變格」なるを

○俗解てよを初學下



まなをち去ぬの類（死ぬトイフコトバモコノ格ナリ）なれなり。  
さて去ぬをいぬいぬるいぬれと三轉しもて  
いぬをも起よものが起よも應じてそが結  
となりいぬるをぞや起よものが起よも應じ  
てそが結となりいぬれをこそ起よも應じてそ  
が結となるあり。

たとへむ郭公を今なきていぬ今郭公のな  
きていぬたゞ今も郭公をなきていぬる今  
ぞ郭公をなきていぬる今こそ郭公をなき  
ていぬれとやうよ句首よ應じ句尾を三様

よ轉じてむまぶがごとし。

〔ら行四段一格〕なるを

まなをち有りの一種なれなり。（在リ居リ侍リ坐リトイフコトバモコノ格ナリ）

さて有りをありあるあれと三轉しもてあり  
をも起よものが起よも應じてそが結とな  
りあるをぞや起よものが起よも應じてそが  
結となるあり。

たとへむ去の頃を暇あり人の今日を暇あ  
り人の今日を暇ある去の頃ぞまこしを暇

ある「あ」の頃こそ暇をあれとやうよ句首よ  
應じ句尾を三様又轉じてむまぶがごとし。  
四段より「ら」「四」「一」はたらく格なるを

まなをち「往けり」卧せり立てり逢へり讀めり  
釣れりの六種あれなり。(コノ格ノコトガ  
數シラズアリ。)  
さて「往けり」を「ゆけり」ゆけるゆけれと三轉し  
もて「ゆけり」を「も」起「よ」も「の」が起「よ」も應じて  
その結となり「ゆける」を「ぞ」や起「よ」も「の」が起「よ」  
も應じてその結となり「ゆけれ」を「こそ」起「よ」應  
じてその結となるあり。

たとへむ人々今日雪見よゆけり人の今日  
も雪見よゆけり人の今日を雪見よゆける  
今日ぞ人を雪見よゆける今日こそ人を雪  
見よゆけれとやうよ句首よ應じ句尾を三  
様又轉じてむまぶがごとし。

自餘卧せり立てり逢へり讀めり釣れりの五  
種もまたそれみあひ準じふせりふせるふせ  
れたてりたてるたてれあへりあへるあへれ  
よめりよめるよめれつれりつれるつれいと  
やうよおのく三轉しもて各起端よあひ應じ

○俗解てよきを初學下

てそが結むすとなるおとをべて上あよおなじ。

くくしきよりら四一しはたらく格かなるを

をなをち寒さむり烈はげしり朗はけり慨あたり

の四種ししゆおれなり。（コシノ格ゾアコトバ）

さて寒さむりをさむりさむりさむりさむり

轉まじもてさむりををむ起およもの起およも

應こたじてそが結むすとなりさむりををむ起およも

じてそが結むすとなるあり。

たとへむ今朝けさを風かぜいと寒さむり風かぜの今朝けさい

たく寒さむり風かぜの今朝けさいたく寒さむり風かぜぞ今

朝あを寒さむり風かぜこそ今朝けさを寒さむりれとやうよ  
句首くしゆよ應こたじ句尾くびを三様さんようよ轉まじてむをぶが  
ごとし。

自餘しよ烈はげしり朗はけり慨あたりの三種さんしゆもま

たそれよあひ準まじはげしりはげしりはげしり

げしりれさやけりさやけりさやけり

られたりうれたるうれたれとやうよ

おのく三轉さんてんしもて各起端かくきたんよあひ應こたじてそが

結むすとなる事をべて上あよおなじ。

くしき活いなるを

をなをち寒し烈し朗けし慨たしの四種ふれ  
なり。（コシラズアリ。）  
さて寒しをさむしさむきさむけれと三轉し  
もてさむしを「も起」よも「の起」よも應じて  
その結となりさむきを「ぞや起」よも「の起」よ  
も應じてその結となりさむけれを「こそ起」よ  
應じてその結となるあり  
たとへむ今日を風いと寒し今日を風のう  
たで寒し今日も風のいたく寒き風ぞ今朝  
を寒き風こそ今朝を寒けれとやうよ句首

よ應じ句尾を三様よ轉じてむまぶごごと  
し。  
自餘烈し朗けし慨たしの三言もまたそれよ  
あひ準じはげしはげしきはげしけれさやけ  
しさやけきさやけけれうれたしうれたまう  
れたけれとやうよおのく三轉しもて各起端  
よあひ應じてその結となるおとまべて上よ  
おなじ。

〔動質二轉各應格〕とを「も」の「ぞ」やの三起端よ  
を尾を轉ぜむして一様よむまびこそその起端よ

俗解てよをを初學下

のみ尾を轉じて異様よむをびその句の語尾を  
所作動詞の作斷續名方然機格（キレトマルト体  
言ニツラナルト  
ヲカヌル現在（作已然機格の二つよ轉じて各種  
よむをぶものをさす。

さて去の結よあづる（活語轉用格を四段活（五  
音圖中六行ニワタリ上ニ位  
四段ニハタラクモノ）上一段活（五十音圖中六行  
ニワタリ上ニ位  
セラル一段ニハ  
タラクモノ）下一段活（五十音圖中六行  
ニワタリ上ニ位  
セラル一段ニハ  
タクモノ）の三種とす

四段活なるを  
をなをち往く臥を立つ逢ふ讀む釣るの六種

おれなり。（コシノ格ノコトバ  
數シラズアリ。）  
さて往くをゆくゆけと二轉しもてゆくを  
も起よもの起よもぞや起よも應じてそが  
結となりゆけをこそ起よのみ應じてそが結  
となるあり。

たとへむををれを學校へゆく教師のくるを  
迎よゆくをれを夜學よぞゆくをれを物を  
學よこそゆけとやうよ句首よ應じ句尾を  
二様よ轉じてむをぶがごとし。

自餘臥を立つ逢ふ讀む釣るの五種もまたを

れよあひ準じふもふせたつたてあふあへよ  
むよめつるつれとやうよおのく二轉しもて  
各起端よあひ應じてそが結となるふとまをべ  
て上よおなじ。

上一段活なるを

まなもち着る似る乾る見る射る居るの六種  
おれなり。煮る噴る鑄る用ある率ある  
トイフコトバモコノ格ナリ。  
さて着るをきるきれと二轉しもてきるを  
お起よもの起よもぞや起よも應じてそが  
結となりきれをこそ起よのみ應じてそが結

となりきれをこそ起よのみ應じてそが結と  
なるなり。

たとへむ雨ふる日を簦をきるゆく人の今  
日を簦をきるあつき日ぞ羅カネの單カネをきる  
さむき日こそ衣をかさねてをきれとやう  
よ句首よ應じ句尾を二様よ轉じてむをぶ  
うごとし。

自餘似る乾る見る射る居るの五種類もまた  
それよあひ準じにるにれひるひれみるみれ  
いるいれみるおれとやうよおのく二轉しも

てその各起端よあひ應じてその結となるよ  
ときべて上よおなじ。

〔下一段活〕なるを

きなをち蹴るの一言ふれなり。コノ格ノコトハ蹴  
ルノホカニナシ  
さて蹴るをけるけれと二轉しもてけるを  
も起よもの起よもぞや起よも應じてその  
結となりけれをこそ起よのみ應じてその結  
となるなり

たとへむ馬を足もて人をける馬が人をけ  
る馬を足もて人をける馬こそ足もて人を

けれとやうよ句首よ應じ句尾を二様よ轉  
じてむきぶがごとし。

〔動質不轉をもの應格〕とをもの  
よのみかぎりてその結となり自餘のぞやこそ  
の兩起端よをさらよあづらむその句の語尾  
を轉せむして〔所作動詞〕の〔作命令機格〕〔爾矣動詞〕  
の〔爾命令機格〕よてむきぶものをさま。

さてその結よあづらる〔活語轉用格〕を〔四段命令〕  
〔下二命令〕〔變格命令〕ら四一命令〔四段ら四一命令〕  
くしきら四一命令の六種とむ。

〔四段命令〕なるを

をなをち往け臥せ立て逢へ讀め釣れの六種  
類おれなり。（コシラズアコトバ）  
さて往けをゆけのほろ尾を轉ぶるまとな  
くむ起との起とのみ應トてその結と  
なるあり。

たとへむ今日を歌の會よゆけ人の歌の會  
よゆけとさそふとやうよ句尾を轉せむし  
てむののの兩起端をかぎりてむをぶら  
ごとし。

自餘ふせたてあへよめつれの五種もまたそ  
れよあひ準じ尾を轉ぶるまとなくむのの  
の兩起端よのみ應じてその結となるまとな  
たく上よおなじ。

〔下二命令〕なるを

をなをち得受け瘦せ捨て兼ね換へ譽め超え  
枯れ植ゑの十種類おれなり。（コシラズアコトバ）  
さて得をえのほろ尾を轉ぶるまとなくむ  
む起との起とのみ應じてその結となる  
なり。





應じてそが結となるまとまたく上よおなじ。

〔ら四一命令〕なるを

まなをち有れの一種類ふれなり。（在れトイフコ

トバモコ  
ノ格ナリ

さて有れをあれのほろよ尾を轉ざるまとな

くむも起との起とよのみ應じてそが結とな

なるなり。

たとへむ人を尊王愛國の情あれし識者

がされよ敬神の志あれとてまむとやう

よ句尾を轉せむしてむもの兩起端を

かぎりてむまぶがごとし。

〔四段ら四一命令〕なるを

まなをち往けれ臥せれ立てれ逢へれ讀めれ

釣れの六種類ふれなり。

さて往けれをゆけれのほろよ尾を轉ざるま

となくむも起との起とよのみ應じてそが

結となるなり。

たとへむきみまづ先へ往けれ人がされ

よまづ先へ往けれとやうよ句尾を轉せむ

してむもの兩起端をかぎりてむまぶ

がごとし。

自餘「臥せれ」立て「逢へれ」讀め「釣れ」の五種類もまたそれよあひ準じ尾を轉むるまとなく「む」の「が」の兩起端よのみ應じてそが結となるまとまたく上よおなじ。

くしきら四一命令なるを

まなをち寒「れ」烈「し」朗「け」慨「た」の四種類まれなり。

さて寒「れ」を「む」のほ「り」尾を轉むるまとなく「む」起「と」の「が」起「と」よのみ應じてそ

が結となるなり。

たとへむ風「む」人「よ」寒「れ」とてふくよまあらじ「風」寒「れ」とふくよやとやうよ句尾を轉ぜむして「む」の「が」の兩起端をかぎりてむまぶがおとし。

自餘烈「し」朗「け」慨「た」の三種類もまたそれよあひ準じ尾を轉むるまとなく「む」の「が」の兩起端よのみ應じてそが結となるおとまたく上よおなじ。

名質不轉通應格とを「む」の「が」ぞ「や」こそ「の」各起

端一般も通じ句首をえらむむ句尾を轉ぜむし  
て〔名詞〕よてむまぶものをさま。

まなち山櫻花秋の夜の月雪の曙などの類  
おれなり。

さて山櫻花を「やまざくらむな」のほろ尾を  
轉むる事なく「む」起よも「の」起よも「ぞ」や起

よも「こそ起」よもをべてよ應じてそが結とな  
るなり。

たとへむみれとあるぬ山櫻花「入」のたを  
れる山櫻花峯志ろくかゝれる雲や山櫻花

峯志ろくみゆる雲こそ山櫻花とやうよ一  
様よまべての句首よ應じて句尾をむまぶ  
がごとし。

### 第八章

てよをむ外結尾の譯解ならび  
よ〔起結照應格〕の活語表圖

てよをむ外結尾の意義格法をな左よものせ  
る〔起結照應格〕の活語指掌圖よつき本文とひき  
てらしみて〔活語轉用格〕のあるやうと〔起端靈辭〕  
よ照應すべき格法のあるやうとをつむらよ會  
得徹底をべし。











俗解て子を初學下の巻終

令	命	一	四	ら	ぎ	しく	令	命	一	四	ら	段
概有	朗有	烈有	寒有	釣有	讀有	逢有	立有	臥有				
う	さ	は	さ	つ	よ	あ	た	ふ				
れ	け	げ	む	れ	め	へ	て	せ				
ウ	サ	ハ	サ	ツ	ヨ	ア	タ	フ				
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ				
ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク				

明治十八年七月十七日版權免許  
 同 十九年五月 出版

著者無出版人

東京府平民

林 纒 臣

神田區西小川町二丁目十一番地

發兌元

體言を真字書きの舎

右 同 所

大賣捌所

九 春 堂

東京三十間堀吉百五番地



